

勝鬘經の研究

——特に如来藏思想を中心として——

香 川 孝 雄

- 一、序 論
- 二、ビブリオグラフィ
- 三、空、不空の如来藏
- 四、如来藏と法身
- 五、煩惱論
- 六、衆生論
- 七、如来藏染淨依持説
- 八、如来藏の五藏義
- 九、実践論
- 十、結 論

—

仏教々理を最も簡単に要約して言うならば、煩惱に充て

る現実の世界から目覚めて「覚する」ことであり、又「覚せしめる」ことである。覚者たるものは阿耨多羅三藐三菩提を成就し、智慧、慈悲が満足せられて一切の繫縛より解脱せる彼岸の理想者であるが、それに対して衆生は、貧欲に満ち、そのために苦悩にあえぐ此岸の現実者である。この両者の関係の間に仏教は成立つている。此岸の衆生をいかにすれば彼岸の覚者たらしめ得るか、又、覚者たり得るか、これこそ釈尊出家の一大契機であり、二千五百年の仏教々理史も実にこの課題追究への歴史であつたと言つても過言ではなからう。出来得るならば一人残らず救いたいが、一切衆生に成仏の可能性がありや否や、これは又、仏

性論評史として三国を通じて見られるものであるが、一切

来智如来眼如来身。^⑨

衆生に成仏の可能性のあることを始めて理論的根拠を示して説かれたのが今ここに問題としようとする如来蔵の教説である。その起源は、*Anguttara nikaya* ^①に出で、舍利弗阿毘曇論や、阿毘達磨大毘婆沙論、阿毘達磨順正理論及び成実論等で論議せられている心性本淨説であろうと考えられるが、^②この思想的流れは、般若経の縁起論、華嚴経の唯心論の影響を受けて如来蔵思想が成立したごとくである。この教説に最も近い思想は、華嚴経、如来性起品に、爾時如来。以ニ無障礙清淨天眼。觀察ニ一切衆生。觀已作ニ如レ是言。奇哉奇哉。云何如来具足智慧在ニ於身中。而不ニ知見一我当テ教ニ彼衆生一覺悟聖道悉令_下永離_二妄想顛倒垢縛_一。具見_下如来智慧在ニ其身内一与レ仏無_レ異。

とあり、この思想の直接的な影響を受けて成立したのが、如来蔵系經典群中最も初期の經典と考えられる如来蔵経であり、そこには

我以ニ仏眼一觀ニ一切衆生。貧欲恚癡諸煩惱中。有ニ如来蔵経に於いて一応基盤が出来上つたこの思想は更に不増不減、勝鬘、無上依、涅槃と言う一群の經典において成長し、なおも、宝性、仏性、無差別等の論書を生み出し、又、後には、如来蔵を識說的に理解しようとする傾向があらわれ、大乘密嚴経、楞伽経、大乘起信論へと発展したのである。シナにおける華嚴の学匠、賢首大師法蔵は仏教を随相法執（小乗諸部）真空無相（般若中觀）唯識法相（深密、瑜伽）如来蔵縁起（楞伽、密嚴、起信、宝性）の四宗に分類し、如来蔵縁起宗を理事融通無礙の説として非常に高く評価し、大乘教中の一派と見なしているが、私は一派を形成するほどの勢力は持つには至らなかったであろうと思う。もちろん以上のような経論を産み出したほどの思想であるが、如来蔵として単独に行われた時期は極めて短く、やがて唯識的に又、密教的に解釈せられて、

それらの思想に溶け込むのである。

この思想の発展段階の中、殊に勝鬘經は小部の經典でありながら、その果した役割は極めて大きいと思う。その理由は、如来藏教義の中、主な教義内容はほとんど勝鬘經が始めて説いた教説であり、且つ、後世の論書も最も多くこの經典を引用しつつ論述を進めていることによつても窺い知ることが出来るであらう。今、この經典を取り挙げ、特にそこに説示せられる如来藏思想を解明せんとすると共に、前後の經論との關係にも注意を払つて思想的な位置をも把握したいと思う。

- ① *Āguttara nikāya* I. 5. p.10
- ② 舍利弗阿毘曇論 二七、大正二八、六九七、b
- ③ 阿毘達磨大毘婆沙論 二七、大正二七、一四〇、a—b
- ④ 阿毘達磨順正理論 七二、大正二九、七三三、a—c
- ⑤ 成実論 三、大正三三、二七八、b
- ⑥ 心性本淨説に関しては、西義雄氏「原始仏教における般若の研究」、坂本幸男氏「心性論展開の一断面」(印度学仏教学研究、第二卷第一号所収)に詳論されているからここでは省略する。

⑦ 六十卷本華嚴經三五、大正九、六二四、a

勝鬘經の研究

⑧ 如来藏經典の成立問題に関しては拙稿「如来藏經典の成立について」(印度学仏教学研究 第四卷第一号所収)を参照されたい。

⑨ 大方等如来藏經 大正一六、四五七、b—c

⑩ 起信論義記 上、大正四四、二四三、c

二

〔一〕 諸本

梵本は現存していないが、大乘集菩薩學論の梵本 *Śikṣa-samuccaya* ① に撰受正法章の文が三ヶ所、究竟一乘宝性論の梵本 *Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantrasāstra* ② に二十ヶ所の引用があるところより、その一端は知ることが出来る。經の梵名について *Śikṣasamuccaya* には *Śrīmālā sinha nāda sūtra* 即ち勝鬘師子吼經であるが、*Uttaratantra* の引用には *Āryasrīmālasūtra* 即ち聖勝鬘經となつてゐる。西藏訳には *Ārya śrīmālā devīsīmhanādanamamahāvyaṇasūtra* ③ 聖勝鬘師子吼と名附くる大乘經とある。唯、至元法宝勘同総録④ には、大宝積經第四十八会の勝鬘夫人会の箇所梵題として

阿唎二亞尾喻訶八哩三巴哩赤

(Ārya vyūha-paripriccha)

とあるが、これは南条目録^⑥、大谷目録^⑧の注意することく、次の第四十九会、広博仙人会の梵題である。至元録のそのところには梵題を欠くのみならず、翻訳名義大集の広博仙人会^⑦の梵題には vyāsa-paripriccha となつてゐるから誤つて一会前の梵題としたのであらう。

漢訳は開元録よりする時、次の三度の翻訳があつたことを伝えている。

(1) 勝鬘師子吼一乘大方便經 一卷^⑧

北凉 曇無讖訳 (412~433. A.D.)

(2) 勝鬘師子吼一乘大方便方広経 一卷^⑨

劉宋 求那跋陀羅訳 (436. A.D.)

(3) 勝鬘夫人会 (大宝積經中、第四十八会) 一卷^⑩

唐 菩提流支訳 (706~713. A.D.)

この中、第一訳は現在欠本となつてゐるが費長房の歴代三宝紀第九に至つて始めて経録に出で、且つ出三藏記集第五^⑫では僧法尼の誦出した疑經の中に収められ、隋の衆經目錄第四^⑬、開元釈教錄第一八^⑭、大周刊定衆經目錄第一五等は

いづれもこの説を継承しており、又、曇無讖の伝記にも勝鬘経訳出の記事はどこにも見当たらないから、第一訳と称する曇無讖訳の勝鬘経は存在しなかつたと見て差支えなからう。

第二訳は一般に流通してゐるもので、古来の註釈家も皆この訳によつてゐる。出三藏記集第九に収録される慧観や慈法師の勝鬘経序、梁高僧伝第三及び開元釈教錄第五^⑮の記事を綜合すると、求那跋陀羅は元嘉十二年 (435. A.D.) 海路広州へ来たり、その翌年丹陽郡において、彼自らは手に正本を執り、口に梵音を宣べ、宝雲は伝語、慧観が筆受の任に當つたことを伝えている。

第三訳は、大宝積經に収められた第四十八会であり、その訳出に関する消息は続古今訳経図紀^⑯が詳しく語るところである。今その大要を述べるならば、菩提流支は、玄奘の果し得なかつた大宝積経訳出の事業を中宗の命により、上代の訳と彼の新たに齎した梵本とを勘同し、帝が自ら筆受に当り、又、百僚妃后等も訳場に参列すると言ふ朝廷を挙げたの大事業であつた。

西藏訳は甘殊爾部、宝積部の中、大宝積經の第四十八会がそれであり、題して

phags-pa lha-mo dpal-phen gi sen-gehi-sgra
shes-bya-ba theg-pa chen-pohi mdo⁽²⁰⁾

(聖勝鬘師子吼と名附くる大乘經)

と言ひ二卷より成つており、偈數についてデンカルマ目錄のみは六百偈であるとしている。翻譯者は Jinamitra,⁽²¹⁾

Surendrabodhi, Ye-ses-sdes の三人であり、訳出年代は明らかでないが、翻譯官の名前よりしてラルパチャン王の仏教保護政策の下に、最も翻譯の盛んな時代を思わせ、又、現存最古の西藏大藏經目錄と伝えられるデンカルマ目錄にも記載せられているところ等から見て、芳村修基教授の同目錄編纂推定年代たる八二四年を下ることはあり得ないから第九世紀の初頭頃と考えられる。

以上三訳を概観するに、形態上からはほとんど相違なくその増広や省略の跡すら見られないのであるが、漢訳、西藏訳共に宝積本と同じ箇所を同じように誤つているところが二、三あることは原典学上注意すべきである。これは恐

らく宝積本の梵本に始めからこのような誤りがあり、そのまま流通していたのではなからうか。

(2) 註疏

印度撰述として、世親が勝鬘經の註釈を作つたとは婆藪槃豆法師伝の伝えるところであるが現存しないのみならず、他の書物に引用されたこともないから、或は仏性論のことを言っているのかも知れない。勝鬘經に限らず広く如来藏經、不増不減經等の如来藏系經典の思想を解釈したものととして究竟一乘宝性論、仏性論、大乘法界無差別論等あつて、これらはいづれも勝鬘經研究の上にはなくてはならない論書である。

中国において数多くの註釈書が著されたことは各種の高僧伝や現存の註疏、その他の資料によつても知られ、中国の地に勝鬘經が非常に珍重されたことを物語るものである。矢吹慶輝博士の研究では、実に二十數種の多きを数えられるが現存するものは僅かに次の七部である。

(1) 淨影慧遠 勝鬘經義記 上卷(下卷欠)

(2) 吉 藏 勝鬘宝窟 六卷

(3) 窺 基 勝鬘經述記 一卷

(4) 作者未詳 勝鬘義記 一卷 (首部欠)

(5) 照 法師 勝鬘經疏 (首部欠)

(6) 作者未詳 挾註勝鬘經疏 (失題)

(7) 明 空 勝鬘經疏義私鈔 六卷

この中、(4)、(5)、(6)はいづれも燉煌より発見されたもので不完全であるが、(4)の勝鬘義記は正始元年 (504. A. D) 写訖と言う後記を記しているから、現存最古の勝鬘經註釈であると矢吹博士によつて発表せられた珍本である。又、(7)は、聖德太子の著と伝えられる勝鬘經義疏の複註である。

我が国では次の三部を挙げることが出来る。

(1) 聖德太子 勝鬘經義疏 一卷

(2) 擬然大德 勝鬘經疏詳玄記 十八卷 (初五卷欠)

(3) 普寂律師 勝鬘師子吼經頌宗鈔 三卷

(1)は聖德太子の著と伝えられるが、果して真作であるかが花山信勝、福井康順両氏の間で激論が交わされつつある書物である。

後の二は義疏の複註である。我が国においては最近を除いてこの外に勝鬘經に関する著作はなかつたようである。

以上、中国、日本における註釈を通して代表的なものは吉藏の宝窟と義疏であろう。義疏は一乗章等の前半は甚だ要を得ているが後半の如来藏思想の説示されている部分に入るとあまりにも簡単に過ぎ、その上、時には理解の十分でないような面も見られる。しかし未だ日本文化の揺籃時代であり、又、仏教の伝来されて間もない時代にあつてかくのごとき著述の出たことは著者が誰であろうと我が国の誇りである。それに対し、吉藏の宝窟は当時の学界のすべての説を参考として非常に詳細な研究を行つてゐる。そのため却つて、煩瑣な欠点はあるが、いろいろな学者の説を引用して一々それに批判を加えて最後に彼自身の意見を述べているから、どうしても欠かすことの出来ない書物である。

〔3〕 最近の研究

勝鬘經の研究として原典的には、次の二を挙げることが出来る。

(1) 河口慧海氏

「勝鬘經に就て漢藏両訳の比較研究」

大正十二年 世界文庫

藏訳の和訳と旧訳を対照し、註が施されている。

(2) 月輪賢隆氏

「藏漢和勝鬘經、宝月童子所問經」
三訳合璧

昭和十五年 竜谷大学宝幢会

新旧両漢訳と北京、ナルタン、デルゲの三版校合の藏訳及びその和訳と註とよりなっている。今、西藏訳に関してはすべてこの月輪本によつたものである。

又、中村元博士の報告によれば、カリフォルニア大学にてドイツ人のレッシング教授が多田等觀氏と共に勝鬘經の英訳に努力されていたとのことであつたが、その後、どうなつたかは未だ聞いていない。

思想的研究として特に勝鬘經のみを取り挙げた主なるものは極めて少いが、如來藏思想史上より、この經典に触れたのは非常に多いから、ここでは省略する。

① C. Bendall: Śikṣasamuccaya (Bibliotheca Buddhica I) 1897~1902.

② E. H. Johnston, D. Litt: The Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantrasāstra. 1950. Patna,

③ 北京版、ナルタン版は *devi* となつてゐるが、デルゲ版の如く *devī* でなければならぬ。又、三版共 *māla* となつてゐるが月輪本が改める如く *mālā* が正しい。

④ 至元法宝勘同総録一、昭和法宝總目録二、一八六 b—c
⑤ 大明三藏聖教目錄 二〇頁

⑥ 西藏大藏經甘殊爾勘同目錄 二五六頁

⑦ 翻訳名義大集 神本 P.107. No.132(57)

⑧ 開元釈教録一八、大正・五五・六七四・b

⑨ 同 右 五、大正・五五・五二八・a

⑩ 同 右 一一、大正・五五・五八七・c

⑪ 同 右 一七、大正・五五・六六六・a

⑫ 歴代三寶紀九、大正・四九・八四・b

⑬ 出三藏記集五、大正・五五・四〇・a

⑭ 隋、衆經目錄四、大正・五五・一七三・c

⑮ 開元釈教録一八、大正・五五・六七四・b

⑯ 大周刊定衆經目錄一五、偽經目錄 大正・五五・四七二・a

⑰ 出三藏記集九

慧觀、勝鬘經序 大正・五五・六七・a—b
請外国沙門求那跋陀羅。手執正本口宣梵音。山居苦節通悟息

心。釈宝雲訳爲宋語。徳行諸僧慧嚴等一百余人。考音詳義以定厥文。大宋元嘉十三年歲次玄扈八月十四日。初転梵輪。訖千月終。

慈法師、勝鬘經序 大正・五五・六七・b・c

①⑦ 梁高僧伝三 大正・五〇・三四四・a―三四五・a

①⑧ 開元釈教録五 大正・五五・五二八・a

明版のみは訳出年時を元嘉十二年とするが、訳出に参加した慧観が十三年なることを経序に述べているから彼に従うべきであろう。

①⑨ 続古今訳経図紀 大正・五五・三七一・b・c

②⑩ 目録により多少異なる

デンカル目録 hphags-pa lha-mo dpal-hphren

sen-gehi sgra (聖勝鬘夫人の師子吼)

河口目録 (ナルタン版) lha-mo dpal-hphren gi sen-

gehi-sgra bstan-pa bam-po gnis-pa

(勝鬘夫人師子吼の教 二卷)

河口、世界文庫本の経題 dpal idan lha-mo sen-gehi

sgra-sgras-ta

右は鬘に相当する字を欠いている。谷大目録もこの点を指摘して「河口氏のは何版によられたか、かくの如くんば勝鬘の鬘の字を脱してただ具吉祥天女の義である」と述べている。

②⑪ Prof. Shyuki Yoshimura; The Denkar-ma an oldest Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons with

introductory notes. P.9. No.70

②② 北京版のみ翻訳官についての記事を欠く。

②③ 芳村氏前提書 九―一四頁

同目録の序文中に記されている辰の年 (Brug gi lo) を根拠とし、その年に符合し得る八〇〇、八一二、八二四年の中、そこに掲載する經典が Rat-pa-Car 王代の仏教全盛時代を思わせるところより八二四年説を採用されている。

②④ 婆藪槃豆法師伝 大正・五〇・一九一・a

兄云汝舌能善以毀謗大乘。汝若欲滅此罪当善以解脱大乘。阿僧伽法師殂後天親方造大乘論。解釈諸大乘經華嚴涅槃法華般若維摩勝鬘等諸大乘經論。悉是法師所造。

②⑤ 矢吹慶輝博士「燉煌出勝鬘義記に就て」大正六年、宗教界所収、及び「北魏正始元年筆写現存最古の勝鬘經義記に就いて」鳴沙余韻 第二部所収

②⑥ 福井康順博士「三經義疏の成立を疑う」

花山信勝博士「三經義疏について」福井教授の疑問に即答と共に印度学仏教学研究第四卷、第二号所収

②⑦ 中村元博士「最近に於ける世界の印度及び仏教の研究」印度学仏教学研究 第一卷、第一号、二二頁

三

勝鬘經以前より如来蔵の空、不空については自らその教説の中に意趣せられていたであろうが、明らかに、空、不

空と言う言葉を用いて説示されたのは、勝鬘經を以つて最初とすることが出来る。以後は究竟一乘宝性論、仏性論、大乘法界無差別論の諸論で説かれており、又、大乘起信論でも空、不空真如を説くのであるが、この場合の意義は少し違ふように考えられる。まず空、不空如来藏の意義は何であるかを調べるのであるが、その意義は甚だ把み難く、古今の註釈家達の間でも難関の一つであつた模様で、意見が一定していない。そのことは、本經自体の翻譯にも責任があるようであり、旧訳、新訳、西蔵訳、いづれも大分意味の相違がある。三訳をまず対照すると次のごとくである。

(旧訳)

世尊。空如来藏。若離若脱若異。一切煩惱藏。世尊。不空如来藏。過於恒沙不離不脱不異不思議佛法。^①

(新訳)

謂空如来藏、所謂離於不解脱智一切煩惱。世尊。不空如来藏。具過恒沙仏解脱智不思議法。^②

〔西蔵訳〕

bcom-ldan-hdas de-bshin-gsëgs-pahi-sñin-po

ñon-mons-pa thams-cad kyi shubs dan tha-dad du
gnas-pa ma-grol-bas śes-pa-rnams kyiis ston-pa
dan / bcom-ldan-hdas de-bshin-gsëgs-pahi-sñin-pohi
sams-rgyas kyi chos tha-dod du mi-gnas śin grol-
bas śes-pa bsam-gyis-mi-khya-pa gan-ghahi-klun-
gi-bye-ma-sñed-dag gis mi-ston-pa lags-so /^③

世尊よ。如来藏は、一切の煩惱藏と別異に住し、解脱せざる諸智の空である。

世尊よ。如来藏は佛法と別異に住せずして解脱せる恒河の沙より多き不可思議なる諸智の不空である。

以上のごとく対照すると新訳と蔵訳とは一致しているが旧訳のみは少し異り新訳で不解脱智、蔵訳で ma-grol-bas-śes-pa-rnams (amukajñā. SKT) と訳するところを旧訳は、唯、脱と訳していてその上否定の言葉も欠いている。シナ、日本の註疏にもこのところの解釈に非常な苦心を払っているのみならず、意見がまちまちであるのは一つには、この箇所の翻譯が明確さを欠いているためでもある。まづ註釈によれば、この解釈は二通りの意見に分れ

ているようである。

嘉祥大師吉蔵の勝鬘宝窟は、まず、

「有^ニ能蔵所蔵^ノ故名^ニ如来蔵^ノ」^④

として如来蔵に能蔵所蔵の二あることを明しそれに空、不空の義を当てて、

「仏照^ニ能蔵之法^ニ畢竟空故。名^ニ空如来蔵智^ノ。仏知^ニ所蔵中道仏性^ノ。具^ニ一切徳^ノ。故名^ニ不空^ノ」^⑤

として能蔵たる煩惱蔵が空如来蔵であり、それを見するを空如来蔵智とし、それに対して所蔵たる法身が不空如来蔵であつて、それを見するのが不空如来蔵智であり、いづれも仏智であることを述べんとしているようである。そのことは更に

空如来蔵……空蔵明^ニ煩惱畢竟空^ノ……不空蔵具^ニ一切徳^ノ。^⑥

空如来蔵即是妄。不空如来蔵即是真也。……世尊。空如来蔵。……积有^ニ二種^ノ。一妄法中空無真実如来蔵。此是互無空也。二妄法虚誑。故名為^レ空。此当体明^レ空。以^ニ此空義^ノ。能蔵^ニ如来^ノ故名^ニ空如来蔵^ノ。……世尊。

不空如来蔵者。……恒沙仏法体有^ニ不空^ノ故名^ニ不空^ノ。^⑦

と語るところより明らかである。これに類する説は凝然大徳の勝鬘經疏詳玄記である。即ち、

空義是能覆体。真実即所覆法。^⑧

問何故是名^ニ空如来蔵^ノ。答妄法即体本来空。……問何故

此義名^ニ不空蔵^ノ。答智体本有。於^レ中即有^ニ無量万徳^ノ。以^レ智為^レ首。以^レ智顯^レ之。故名^ニ不空^ノ。^⑨

更に宝窟の文を引用して

今疏家意与^ニ金陵^ノ同然。^⑩

と述べていることによつて、嘉祥と凝然の意見が一致していることを知り得る。この他、燉煌本の照法師の疏や同じく燉煌本の勝鬘義記もこれと同様の説である。以上の説を今便宜上第一類の解釈として置こう。

これに対して第二類の解釈とでも称すべき他の解釈がある。即ち宝窟に「江南師积云」として引用する異説がそれである。

此积空如来蔵。謂^レ脱^ニ離衆惑煩惱蔵^ノ。無累故云^レ空。蘊^ニ万徳^ノ故云^レ蔵。此則法身也。此大意明。法身顕時。

空無ニ諸果。故言ニ空如来藏。世尊不空如来藏者。此明ニ
隱時之藏。隱時未脫離異於煩惱。為ニ不空如来藏。以ニ
其深隱。故云ニ不思議法、以未ニ脱衆累。故云ニ不
空。隱而未ニ彰。名レ之為レ藏。大意明ニ隨時仏性ニ為ニ
煩惱所覆。故云ニ不空。今謂ニ此釈二事不可。⑮

と言つて、吉藏はこの説に反対しているのであるが、この
説に従えば、出纏の法身を空如来藏と称し、在纏の法身を
不空如来藏と考えている。この解釈に類する疏としては、
聖徳太子の義疏と、普寂律師の顓宗鈔を挙げることが出来
る。

〔義疏〕

未ニ離煩惱ニ故藏為ニ不空。已離ニ煩惱ニ故法身為レ空。
所以照レ藏為ニ如来藏智。照ニ法身ニ為ニ如来空智。
照レ藏照ニ法身ニ智。即終是一体智。⑭

〔顓宗鈔〕

（前掲の宝窟の説を引用して）寂日。此弁恐不允当。…
…若是情有妄計隱ニ覆真理ニ之義者。応レ言ニ煩惱隱覆ニ
也。那得レ言ニ空義隱覆ニ乎。前上宮所弁深得ニ經旨、

也。⑮

と普寂は、吉藏の説を批判し、上宮の疏の説に賛同し、空
義隱覆真実章と言う題名からしても、空義は隱覆せる真実
の相であり、不空は在纏の法身なることを言わんとしてい
る。

このように見て来ると、第一類の解釈では、新訳、藏訳
の空如来藏を不解脱智とし、不空如来藏を解脱智とするの
によく合致するが、空を一切煩惱藏と異つて住すと言うこ
とには相応しない。又、第二類の解釈では、新訳、藏訳の
空を一切煩惱藏と異つて住することには合致するが、空を
不解脱智、不空を解脱智とすることには相応しない。今こ
の問題を説明せんがために、印度に於いて撰述せられた後
期の論書を手掛りとして考察を進めたい。

宝性論梵文如来藏品第一百五十五偈には、

śūnya agantukair dhātuh savirbhagalaksanaih /
asūnyo 'nuttarārdharmāravirbhagalaksanaih //
155// ⑮

界は客塵であり、離を有する相なるによつて空である。

無上法なる不離の相なるによつて不空である。

月輪氏は西藏文よりこの箇所を訳され、今、離を有する相と訳したところを差別的性格と訳され、意味がはつきりとする。故に差別的な有為法の面を空如来蔵と言ひ、無差別的な無為法の面が不空如来蔵であると説かれてゐる。このことは宝性論の他の文によつても理解されるのである。

世尊。是故如来蔵。是依。是持。是住持。是建立。世尊。不離不離智。不断不脱不異無為。不思議仏法。世尊。亦有断脱異外離。離智有為法。亦依亦持亦住持亦建立依如来蔵。^⑪

(tasmād bhagavans tathāgatagarbho nīśraya ādhārah
pratiṣṭhā sambaddhanām avinirbhāganām amukta-
jñānānām asaṃskṛitānām dharmānām / asaṃba-
ddhanām api bhagavan vinirbhāgad harmānām mu-
kta-jñānānām saṃskṛitānām dharmānām nīśraya
ādhārah pratiṣṭhā tathāgatagarbha)^⑫

即ち、右の文は、前半は不空を、後半において空の如来蔵

が説かれてゐるが、明らかに不空の方を無為とし、空を有為と言つてゐるのである。宝性論は、かかる解釈を施してゐるが、更に大乘法界無差別論の解釈を参照してより理解を深めたい。この論書は同じ提雲般若の訳出として二本あり、丹本の方は大体旧訳と同じであるが、別訳国宋両本では

空如来蔵。与ニ煩惱穀。和合無レ別。不レ了ニ解脱^⑬。
不空者。過ニ恒河沙。不離不脱不異不思議仏法成就。

とし、空を煩惱の穀 (Toga) と和合し、未だ解脱しておらない状態を説く点は他の論書には見られない説示の仕方である。この論書は梵本もなく蔵訳もないから原典的に吟味することは出来ないが、これらを綜合したところによつて私は次のように理解出来る。空義は如来蔵が未だ客塵の煩惱に包まれてゐる因位の状態であり、染と浄とが和合して住する意味において空義なのであつて、これは人間の現実の相を語つたものに外ならない。これに対して不空義は煩惱より全く解脱した法身そのものを言うのであつて、そこには染と浄との対立と言うものではなく、染浄を超越した畢竟

空、空をも更に否定して乗り越えた世界である意味において不空と説かれたのであつて、これが仏教者にとつての理想とする境界である。換言すれば空義は真空の立場であり不空義は妙有的展開であると言える、この故に、先に述べた第二類の解釈は不当であると考えられる。しからば普寂の言う論拠たる空義隱覆眞実章と言う章題より空なる法身が隱覆せられているとする説はいかに抗弁され得るだろうか。勝鬘經における章の題目は經末流通分に本經を何と呼んで流通すべきかについて多くの名を挙げているところよりとつたもので旧訳の「説空義隱覆眞実。如是受持」^{②①}に当る藏文によると *ston-pa-nid kyi don gyi dgos-pa pa yan-dag-par-bstan-pa shes-bya-bar yan zun sig* / (空性の意義の深密の正しき説示と名附くと受持せよ。)となつていたので、何ら空義が隱覆していると言つた意味がなく、たまたま求那跋陀羅が隱覆と訳した為に、普寂はこれを混同したのである。

それではこの空、不空の如来藏義はいつ頃から説かれ出したのであろうか。

両者の考えは、如来藏と言う考えが成立した当時より存在した筈である。しかし空、不空と言う言葉で呼ばれたのは勝鬘經が最初であるが、不増不减經には、不空如来藏とほとんど同じ文が法身の義を説くところに用いられているのに注意せねばならない。即ち、

法身義者。過於恒沙不離不脱不断不異。不思議仏法如来功德智慧。^{②②}

と説かれていて、不空如来藏は結局法身そのものである。ここに我々は具体的な発展段階を見ると共に勝鬘經が如来藏思想史上に一時期を劃したことを知ることが出来る。

① 勝鬘師子吼一乘大方便方広經 (以下勝鬘經と略す)
大正・一二・二二一・c

② 勝鬘夫人会 大正・一一・六七七・a

③ 月輪本 一三〇、一三二頁

④ 勝鬘宝窟下本 大正・三七・七三・b

⑤ *ibid*

⑥ *ibid* 七三・c

⑦ *ibid* 七四・a

⑧ 勝鬘經疏詳玄記一七 大日本仏教全書四 二四九上―下

⑨ ibid 二五〇・下

⑩ ibid 二五一・下

⑪ 照法師撰、勝鬘經疏 大正・八五・二七五・a

空如来藏者。煩惱是可空之法故。可名空如来藏。煩惱鄙惡可指捨故名若離可得易脫故言若□。可得變異言若異。如此之法未指其体故。次言一切煩惱藏也。……從此以下說作不空如来藏。過於恒沙者。逕於劫数体不可斷離故言不離。常住湛然不可易脫故言不脫。不異者。不可變易。雖言不異等指其状故。次言不思議仏法是也。

⑫ 勝鬘義記 大正・八五・二五九・b

空如来藏者。若離說一切煩惱藏。此解空智也。不空如来藏說不思議仏性法。此明衆生仏性也。

⑬ 勝鬘宝窟下本 大正・三七・七四・a―b

⑭ 勝鬘經義疏 大正・五六・一六・b

⑮ 勝鬘師子吼經顯宗鈔下 大日本仏教全書四 三五三・上

⑯ The Ratnagotravibhāga. P.76.

⑰ 究竟一乘宝性論四 大正・三一・八三九・a

⑱ The Ratnagotravibhāga P.73.

⑲ 大乘法界無差別論(國宋阿本) 大正・三一・八九六・a

⑳ 勝鬘經 大正一二・二三・b

㉑ 月輪本 一六八頁

㉒ 不增不減經 大正・一六・四六七・a

四

前章の終りにおいて少し触れたごとく、不増不減經においては勝鬘經の説く不空如来藏義が、そのまま法身の義として説かれていた。凡そ如来藏の教説は、所纏の煩惱身と雖も法身を蔵しているが、能蔵の煩惱から解脱して法身を顯現してそこに涅槃の境地を得ることが大綱であるところから、法身に關する説示もまた重要な地位を占めるのである。如来藏經においては、法身という言葉は用いられていないが、如来智如来眼如来身或は単に如来身と言っているのが結局他經典に見られる法身に相当するものであろう。如来藏經には次のごとく説かれる。

我以_二仏眼_一觀_二一切衆生_一。貪欲恚癡諸煩惱中。有_二如来智如来眼如来身_一。結加趺坐儼然不動。(中略)譬如_二天眼之人_一。觀_二未敷花_一見_二諸花_一肉有_二如来身_一結加趺坐。除去_二萎花_一便得_二顯現_一。

このように如来智如来眼如来身は煩惱中の如来藏法身を指すものに外ならない。不増不減經では、前述のごとく、法身が不空如来藏なることが知られるが、更に衆生界も法身

や如来蔵と同じものであることを明らかにしているところがある。これは宝性論も引用するところであるが、

舍利弗。甚深義者即是第一義諦。第一義諦者即是衆生界。衆生界者即是如来蔵。如来蔵者即是法身。^③

と説き、更に如来と衆生界とが一なることを、法身を媒介として衆生も菩薩も如来も同じであることを説き明すものとして次の經文を挙げることが出来る。

舍利弗。即此法身過_二於恒沙。無辺煩惱所_レ纏從_二無始世_一來隨_二順世間_一。波浪漂流往_二來生死_一。名為_二衆生_一。舍利弗。即此法身厭_二離世間生死苦惱_一。棄_二捨一切諸有欲求_一。行_二十波羅蜜_一。撰_二八万四千法門_一。修_二菩提行_一。名為_二菩薩_一。復次舍利弗。即此法身離_二一切世間煩惱使纏_一。過_二一切苦_一。離_二一切煩惱垢_一。得_レ淨得_二清淨_一。住_二於彼岸清淨法中_一。到_二一切衆生所願之地_一。於_二一切境界中_一。究竟通達更無_二勝者_一。離_二一切障_一。離_二一切礙_一。於_二一切法中_一得_二自在力_一。名為_二如来_一。應正遍知_一。是故舍利弗。不_レ離衆生界_一有_二法身_一。不_レ離法身_一有_二衆生界_一。衆生界即法身。法身即衆生界。舍利弗。此二法

者義一名異。^④

即ち法身を具すると言うことで衆生も菩薩も如来も無差別である。三者は実に法身のあり方によつて仮に差別せられるものであり、衆生は煩惱によつて法身が覆われ、生死に流転しているものを言い、又、菩薩は、法身が世間の苦を厭うて十波羅蜜等の行をして菩提行に励むものに名付け、又如来應正遍知とは、一切の煩惱の垢を離れて清淨に到り一切に無礙なるものに名付けて言うのであつて法身と言う面から見れば、現実の相においてこそ差別があるが、本質的には平等なることを強張されているものと見ることが出来る。かくのごとく不増不減經の法身説は、如来蔵經と結びついて、法身が、菩薩にも又一切衆生にも遍満すると言うことは、言い換えれば、一切衆生が如来に撰取されると言うことにもなり、世親が仏性論で述べる如来蔵の三義の中、所撰蔵の意味にも解されるところである。

勝鬘經では法身と如来蔵についてはどのように説かれるであろうか。經には次のごとく説かれている。

〔旧訳〕 如来法身。不_レ離煩惱蔵_一。名_二如来蔵_一。^⑤

〔新訳〕 法身不_レ離煩惱^⑦。名_二如来藏。

として漢訳二訳共に法身が在纏の状態において説かれているのであるが西蔵訳では、

de-ñid la de-bshin-gsëgs-pahi-sñin-po chos-kyi-sku
ñon-mons-pahi-sbubs nas nes-par-grol-ba shes-
bgyiho / ^⑧

それを如来蔵法身は煩惱蔵よりの完全なる解脱と言われている。

とあり意味が異なる。ここを月輪教授は問題にせられている。即ち漢訳宝性論には、

如_レ是如来法身。不_レ離煩惱蔵^⑨。所_レ纏名_二如来蔵。

であるが、同論の蔵訳は勝鬘經蔵訳と同じで解脱を否定すべき打消の語が漢訳より見れば欠けているように思われる。無差別論でもやはり

〔丹本〕 即此如来法身。未_レ離煩惱蔵^⑩。説_二如来蔵。

〔国宋両本〕 此即如来蔵未_レ脱煩惱殻^⑪。名_二如来蔵。

と説いて因位の状態にある法身が如来蔵であるように訳しているにもかかわらず、勝鬘經の蔵訳は、デルゲ、ナルタン、北京の三版共打消の字を欠いている。宝性論の蔵訳も

又そうであるがデルゲ版のみは打消の「ma」の字があるそうであり、更に西蔵の高僧 Dharma-rin-can の宝性論註にも打消のある本によっているところのことである。同註には
bcom-ldan-ñdas de-bshin-gsëgs-pahi-chos-kyi-sku
hdi-ñid ñon-mons-pahi-sbubs-las ma-grol-ba-ni de-
bshin-gsëgs-pahi-sñin-po shes-bgyiho //

世尊よ、此の如来の法身が煩惱の殻から解脱せざるものを如来蔵と言う。

以上は月輪教授の論ぜられる大要であるが、梵文の宝性論は、打消の言葉を入れている。

bhagavānstatthagatadharmakāyo 'vinirmuktalega-
kocastathagatarbhan ^⑫

ここに如来蔵が法身であると語られる場合の法身は必ず煩惱蔵に覆われたところの因位の状態にある法身であらねばならない。

次に如来法身の相に対しては如何に見らるべきであるか。經には、

如来法身是常波羅蜜。樂波羅蜜。我波羅蜜。淨波羅蜜。

於ニ仏法身。作ニ是見。者是名ニ正見。¹³⁾

とし三訳いづれも一致している。この常樂我淨の見は以前は顛倒の見として退けられて来たものであつたのが今は顛倒眞実として説かれている。何故に顛倒が眞実であるか、その説かれるに至つた因縁を知るためには顛倒眞実章の經文を調べねばならない。經には、

凡夫識者。二見顛倒。一切阿羅漢。辟支仏智者。即是清淨。辺見者。凡夫於ニ五受陰、我見妄想計著生ニ二見。

是名辺見。所謂常見。断見。¹⁴⁾

とまず断常二見が辺見なることを述べて、

見ニ諸行無常¹。是断見非ニ正見。見ニ涅槃常¹。是常見非ニ正見。¹⁵⁾〔旧訳〕

と言つて、諸行無常と言うのも断見であり、涅槃常と見るのも常見であるとし、根本仏教以来三法印若しくは四法印として仏教の根本教理の二項目が真正面から遮遣せられてゐる。しかしこの經文に対しては原典的な再検討が必要である。と言うのは新訳、西藏訳共に旧訳の意義するところとは違つて、諸行無常も涅槃常もいづれも否定されておら

ない。

世尊。若復有、見ニ生死無常¹。涅槃是常。非ニ断常見¹。是名ニ正見。¹⁶⁾〔新訳〕

bcom-ldan-ḥdas gal-te ḥdu-byed mams la mi rtag-par-ita na de ni deḥi chad-par-ita-ba ma-lags te / de ni deḥi yan-dag-paḥi-ita-ba lags-so // bcom-ldan-ḥdas gal-te mya-nan-las-ḥdas-pa la rtag-par-ita-ba de ni deḥi rtag-par-ita-ba ma lags te / de ni deḥi yan-dag-paḥi-ita-ba lags-so //

世尊よ。若し諸行を無常と見るならば、それは断見ではない。それが正見である。世尊よ。若し涅槃を常住と見るならば、それは常見ではない。それが正見である。

以上の諸訳を比較すると、旧訳において、諸行無常、涅槃常が断見若しくは常見であるとして否定せられていたのが、新訳及び西藏訳によれば、反対に、諸行を無常と見るも、涅槃を常と見るも正見であるとして肯定せられてゐるのである。この問題について、河口氏と月輪氏との意見に相違があつて、河口氏¹⁸⁾は新蔵両訳の方が正しいとし、月輪

①⁹氏は旧訳の方が正しいとせられるが、これは明らかに、旧訳の方が正しいと見なければならぬ。無上依経にはこれと同じことが説かれている。

若計^②諸行無常^③。是名^④断見^⑤。若計^⑥涅槃常住^⑦。是名^⑧常見^⑨。

この他、涅槃經、宝性論、仏性論も同じ説示を行つてゐるから新訳、藏訳は誤りである。このようにたびたび、同じ宝積經に収められた漢訳の新訳と西蔵訳が同じ誤りを行うのは、宝積經の梵本において既に書写の時に誤つてそれがそのまま、宝積經として流布されたことに起因するのであらうか。たとえ諸行無常、涅槃常住の見を辺見とすることが一見仏教では逆の説であるからとて偶然に両訳同じくそれを原本と反対に訳したということは考えられないからである。或は、西蔵訳宝積經の中には漢訳よりの重訳が数種含まれているから、西蔵訳經官はこの漢訳を参照したと考えられるかも知れない。いづれとしても旧訳が正しいと考えられるが、この常樂我淨の見を規準として經は衆生を三類に分類し常樂我淨の見が正見であることを順次に明瞭な

らしめて行くのである。

(1) 顛倒衆生於^①五受陰^②。無常常想^③。苦有^④樂想^⑤。無我我想^⑥。不淨淨想^⑦。

(2) 一切阿羅漢、辟支仏智者。則是清淨。辺見者。凡夫於^①五受陰^②。我見^③。妄想計著生^④。二見^⑤。是名^⑥辺見^⑦。

所謂常見、断見。見^①諸行無常^②。是断見非^③正見^④。見^⑤涅槃常^⑥。是常見非^⑦正見^⑧。妄想見故作^⑨如是見^⑩。

(3) 或有衆生。信^①仏語^②。故起^③常想^④。樂想、我想、淨想。非^⑤顛倒見^⑥。是名^⑦正見^⑧。

まず第一類の顛倒の衆生とは、一般凡夫であり、仏教側から言えば外道の見である。第二類においては第一類の見を否定した仏教の立場であるが、今はこの見も声聞、縁覺の教であるとして否定せられ、最後の第三に來て、常想、樂想、我想、淨想を起す見、仏語を信ずる徒がここに容認せられ、その見が正見と見做されるに至る。ここにその過程を知ることが出来るのである。單なる常樂我淨であれば外道の言う我見と何ら異るところはないのであり、外道の見を否定した無我の立場をも更に否定した絶体空の立場で

あることを知り得る。この意味において特に波羅蜜と言う言葉が用いられ、常波羅蜜、樂波羅蜜、我波羅蜜、淨波羅蜜と説かれる所以がここにある。故に因縁觀に基く常樂我淨であることにおいて仏教であり、更に仏教の本旨を發揮するところである。しかし特に我ということについては、誤解を招くことが屢々あつたのであろう。涅槃經にも楞伽經にも外道の我と異るところを注意して次のように説いている。即ち涅槃經では、外道の我は虫が木を食して偶々字を成す譬で説明して、

是諸外道。所_レ言我者。如_二虫食_一木偶成_レ字耳。如來於_二仏法中_一唱_二は無我_一。為_レ調衆生_二故。為_レ知_レ時故説_二は無我_一。有_二因縁_一。故亦説_二有我_一。如_二彼良医善知_一於乳是藥非藥_二。非_レ如_二凡夫所_レ計吾我_一。凡夫愚人_レ計我者。或言大如_二拊指_一。或如_二芥子_一。或如_二微塵_一。如來說_二我悉不_レ如_レ是。是故説言。諸法無我実非_二無我_一。何者是我。若法是实是真是常是主是依性不變易者。是名為_レ我。

と説き大乘入楞伽經には、

仏言。大慧。我說_二如來藏不_レ同外道所説之我_一。大慧。如來応正等覺。以_二性空実際涅槃_一。不生無相無願等諸句義説_二如來藏_一。為_レ令愚夫離_二無我怖_一。説_二無分別無影像如來藏門_一。未來現在諸菩薩摩訶薩。不_レ応_下於_二此執著_一於_上我。

と外道所説の我と同一視せられてはならないことを強張しているのである。

かかる如來法身の常樂我淨の四徳については、如來藏思想史の上では本經を以つて最初と見られ、以後は、涅槃經、無上依經、宝性論、仏性論の説くところであるが、それ以前においても常樂我淨とこそ説かないが經文の各処にそれに似た説示が見られるのである。

如來藏經では法身の常と淨についての説示が予想せられている。

一切衆生。雖_レ在諸趣煩惱身中_一。有_二如來藏_一常無_二染汚_一。……一切衆生如來藏常住不變。

前述の如く如來藏經には法身と言う言葉は用いられていないが、如來藏は在纏の法身の意であり、諸煩惱中の如來

智如来眼如来身は、實に如来法身を指す文句であるから法身について説かれているものと見て差支えなからう。右に引用した經文の中、「常無染汚」は淨波羅蜜であり、「常住不變」は常波羅蜜であると解することが出来る。この兩者は時には、自性清淨、常恒不變、と言う言葉で語られ、ほとんどすべての如来藏經典に説かれるところである。不増不減經では、常と淨はもちろん説くが、更に樂をも説いている。

舍利弗。此法身者是不生不滅法。非過去際。非未來際。離二辺一故。……舍利弗如来法身常。以不異法一故。以不盡法一故。舍利弗。如来法身恒。以常可一歸依一故。以未來際平等一故。舍利弗。如来法身清涼。以不二法一故。以無分別法一故。舍利弗。如来法身不變。以非滅法一故。以非作法一故。²⁷

更に

此法身離一切世間煩惱使纏。過一切苦。離一切煩惱垢。得淨得清淨。住於彼岸清淨法中。到一切衆生所願之地。於一切境界中。究竟通達更無勝

者。離一切障。離一切礙。於一切法中。得自在力。名為如来成正遍知。²⁸

と説き、言葉こそいろいろとさまざまではあるが、常、淨の二に統攝せられ、又その中、「過一切苦」と言うことは、樂のことを意味すると考えられる。

又、央掘摩羅經では仏性という言葉が如来藏と同義に用いられているが、そこでは仏性を、不生、真实性、常性、恒性、不變易性、寂靜性、不壞性、不破性、無病性、不老死性、無垢性とさまざまな形容をもつて説明せんとするのである。これらの種々の表現を統一して纏めたのが涅槃經、勝鬘經等に説示される常樂我淨であろう。不増不減經や、央掘摩羅經の説いていることも結局常樂我淨の四に含まれ得るのである。しかしこの常樂我淨と言うのはそれぞれが別々に他と一線を劃して区別され得るものではない。例えば我について、先に引用した涅槃經の文にあるごとく、我とは、実であり、真であり、常であり、主であり、依性不變易なるものを言うのであるから、我は常とも関連することになる。涅槃經の我を定義するところによれば、

央掘摩羅經には、明らかに我の波羅蜜が予想せられてい
る。即ち真实性であり、常性であり、恒性であり不変易性
なることは、ほとんどそのまま涅槃經の我を定義するこ
ろで述べられているからである。又、不増不減經の場合も、
常であり恒であり、清涼であり、不変であるとするこ
も、我の意味を含んでいると見て差支えなからう。常樂我
淨については、そのように勝鬘經や涅槃經を待つまでもな
く、順次に萌芽として熟しつつあつたのであるが、我は表
面には説かれなかつた。これは無我と言うことが仏教の最
高の標識であるところから控えていたのであらうが、勝鬘
經では一大勇猛心をもつて表面に堂々と唱えるに至つたの
である。このように考えるならば、如来藏經や不増不減
經、央掘摩羅經の成立は思想的な面から言つて、法身の
四波羅蜜（完成された形における）を説く、勝鬘、涅槃、
無上依の諸經より早いことは明らかである。故に不増不減
經の法身觀は涅槃經の法身觀の影響を受けて成立したもの
であると言ふ七里氏^⑮の意見は妥当でないと考えられる。

- ① 大方等如来藏經 大正・一六・四五七・c
- ② 究竟一乘宝性論二 大正・三一・八二四・a
- ③ 不増不減經 大正・一六・四六七・a
- ④ *ibid.* 四六七・a—b
- ⑤ 仏性論二 大正・三一・七九五・c—七九六・a
この三義に関しては、水谷幸正氏「如来藏と仏性」（仏教大
学学报第三十一号所収）、拙稿「如来藏の諸相」（アッタディ
ーパ第三号所収）を参照されたい。
- ⑥ 勝鬘經 大正・一二・二二一・c
- ⑦ 勝鬘夫人会 大正・一一・六七七・a
- ⑧ 月輪本 一三〇頁
- ⑨ 究竟一乘宝性論二 大正・三一・八二四・a
- ⑩ 大乘法界無差別論（丹本） 大正・三一・八九四・a
- ⑪ 同 論（国宋両本） 大正・三一・八九六・b
- ⑫ *Ratagotravibhaga* P. 12
- ⑬ 勝鬘經 大正・一二・二二一・a
- ⑭ *ibid.*
- ⑮ *ibid.*
- ⑯ 勝鬘夫人会 大正・一一・六七七・b
- ⑰ 月輪本 一三八頁
- ⑱ 河口慧海氏 勝鬘經に就て漢藏兩訳の比較研究 一〇七一
〇九頁（世界文庫本）
- ⑲ 月輪本 註二一、二二頁

- ②① 無上依經 大正・一六・四七二・c
 ②② 勝鬘經 大正・一二・二二二・a
 ②③ 毘婆沙
 ②④ 大般涅槃經二 大正・一二・三七八・c―三七九・a
 ②⑤ 大乘入楞伽經二 大正・一六・五九九・b
 ②⑥ 大方等如來藏經 大正・一六・四五七・c
 ②⑦ 不增不減經 大正・一六・四六七・a―b
 ②⑧ 毘婆沙 四六七・b
 ②⑨ 央掘摩羅經二 大正・二・五二六・a―b
 ③⑩ 七里恒賢氏「勝鬘經と如來藏心」宗學院論輯第二十一輯所収
 一四九頁

五

仏教の教理は常に彼岸と此岸、理想と現実、悟と迷の対決の中に説かれている。ここでも前節の法身説が理想に対する説示であるとすれば、今述べんとする煩惱論は現実のわれわれの自己觀察である。煩惱は本来どんな性質を持っているか、不増不減経には、

此本際未離脱不相応煩惱所纏不清淨法。唯有如來菩提智

之所能斷。舍利弗。我依此煩惱所纏不相応不思議法界。為衆生故說客塵煩惱所染。自性清淨心不可思議法。^①

とあり、自性清淨心、客塵煩惱の立場を堅持しているのを知り得るが不増不減経では、これ以外煩惱のことについてあまり触れていない。しかし勝鬘経になると急に煩惱の教説が單に客塵煩惱と言うことでなしに新たな相で勝鬘獨特の煩惱論を展開している。

まず煩惱を大別して、住地煩惱と起煩惱の二種を挙げ、住地煩惱に、見一処住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地、無明住地の五を数え、この中、前四住地の煩惱を總称して、有愛數住地と呼ばれる。この有愛數住地は、一切の起煩惱の所依であるが、他の無明住地の煩惱は更に一段と有力であらゆる起煩惱、上煩惱の根本所依となり、仏智のみ能く斷ずるところであつて、二乗のものの所斷ではないと説かれる。無明住地がかくのごとく四住地に勝れると言うことを説明する文に關して、漢訳阿訛と西蔵訛との間に相違がある。

如^レは無明住地力。於^ニ有愛數四住地[。]其力最勝。^{〔旧訛〕}^②

如く、是無明住地蔽^③ 四住地^④〔新訳〕
しかるに西蔵訳では、

de-bshin-du mar-ig-paḥi-gnas-kyi-sa srid-paḥi-ḥdod-
chags la gnas-paḥi gnas-kyi-sa she-bgyi-bas kyan
gnas-kyi-sa-bshi-po ḥdi-dag zil gyis gnun te /
かくの如くに、無明住地は有愛に住する住地と言われる
から、又それら四住地を威圧して、

と訳されていて、無明住地は又、有愛住地と異称せられる
と言うような説き方であるが、何故にこのように説くかに
ついて月輪教授は、如来不思議秘密大乘経卷十二を引用し
て、この経典は竜樹以前の成立であるが、無明と有愛の両
者が屢々一具して談ぜられた慣例がここに顯われたもので
ある^⑤と説明されている。経の一部分が月称の中論釈、第
十八章に引用せられており、それによれば、

heṭvārambanapaṇāgama ityavidyābhavavirisinopagaṇa-
syāitadadhivacanam / avidyābhavavirisinopagaṇa
ityahamkaramamakāropagaṇasyāitadadhivacanam^⑥

因所縁の寂靜とは、無明有愛の寂靜の増語である。無明
有愛の寂靜とは、我執我所執の寂靜の増語である。

とあり、厳密に言えば、無明と有愛とは同義ではない。西
蔵訳の経文が単に以上の慣例がここにはあらわれたのであ
ると言うだけではもう一つ納得し難いように思われる。こ
に言う有愛住地とは、前四住地の第四たる有愛住地を指
すのでなく四住地全体を指す有愛数住地を意味し、無明住
地一つのみで有愛数住地の異称とされ、又無明住地が前四
住地を統攝して住せしめるようなところから無明住地が又
有愛に住する住地と異称せられたのではなからうか。

又無明住地は成唯識論第八には無明習地と訳され、法界
無差別論の丹本は無明住地となつているが国宋両本では、
無明習気地^⑦と訳され、宝性論の藏文にも mar-ig-paḥi-
bga-chags kyi sa (無明習地) と訳されているようであ
る。習気と言つても意味は通ずるがその原語たる vāsana
(住) と vāsana (習気) との混同から来ているようであ
つて、正しくは住地と訳さるべきであり、習気とするの
は、唯識的立場よりの解釈である。

煩惱と心との關係について、起煩惱は剎那心と相應するが、無始無明住地煩惱は剎那心とは相應せずと語られている。⑧ただし煩惱が心の剎那に相應、不相應の問題は阿毘達磨仏教で論じられているところである。婆沙論二七には、若心本性清淨客塵煩惱所染汚故相不清淨者。何不下客塵煩惱本性染汚与ニ本性清淨心一相應故其相清淨。⑨又、成実論には、

煩惱与レ心常相應生。非ニ是客相ニ⑩

と心性本淨客塵煩惱の説を批判している。心性非本淨論者は、煩惱は心と相應しないから客塵とする説は妥当でないとする。これに対する本淨論者の反論がないのでわからないが、少くとも本經においては、煩惱は心とは全々触れることなきものであり、起煩惱は相應するが、無明住地の煩惱は剎那心とは相應しない為に客塵であると説いていることは、婆沙の攻撃に対し煩惱が剎那心と相應することは認めねばならない。しかしそれは起煩惱のことで客塵とするためには、どうしても心と不相應なる煩惱がなければならぬ。ないところから説かれたのが無明住地煩惱であるまいか。

この煩惱は無始以来存する煩惱であり、一切の起煩惱、上煩惱の根本所依である。この上煩惱に十一種を挙げることは又本經独自のものであつて、心上煩惱、止上煩惱、觀上煩惱、禪上煩惱、正受上煩惱、方便上煩惱、智上煩惱、果上煩惱、得上煩惱、力上煩惱、無畏上煩惱であるが、その一々の意味や性格については經には何ら語られていないが、宝窟⑪によれば、まず上煩惱は、諸徳の上を覆う義、起ること増強なる義、起ること根本の上なる三義より上煩惱と名附けられるとし、その一々につき釈するところを簡単に要約すると、心は菩提心、止は定の初、觀は慧の初、禪と正受は定行成ずること、方便と智とは慧行成ずること、果は以下の三つのものを総じたもの、以下三つは別で徳は功徳、力と無畏は仏の智慧であり、それらを覆い、又それらを行ずるに際して障となるものであると言つてゐる。以上大要を述べた本經の煩惱論は、これより後に名目の上では相承されたが、組織の上では、全く異つた説き方に改められ、宝性論や仏性論では、如来藏經の九喻に一つ一つをあてはめて説かれてゐる。

煩惱を説くに当つては本經では衆生の問題がからみ、一乘三乘の問題へ関連して来るが、そのことは次へ譲ることとする。

- ① 不増不减經 大正一六・四六七・c
- ② 勝鬘經 大正・一二・二二〇・a
- ③ 勝鬘夫人會 大正・一一・六七五・b
- ④ 月輪本 八六頁
- ⑤ 同書 註九、一〇頁
- ⑥ Louis de la Vallée Poussin: *Prasamapada* P.361
- ⑦ 大乘法界無差別論(国宋兩本) 大正・三一・八九三・c
- ⑧ 勝鬘經 大正・一二・二二〇・a
- ⑨ 阿毘達磨大毘婆沙論二七 大正・二七・一四〇・a一b
- ⑩ 成実論三 大正・三二・二五八・b
- ⑪ 勝鬘經 大正・一二・二二二・b
- ⑫ 勝鬘宝窟中末 大正・三七・五七・b一c

六

前述のごとく、無明住地の煩惱は仏地の所断であつて、阿羅漢、辟支仏の所断ではない。彼等は起煩惱は断じているが、無明住地の煩惱に未だ覆われているから、完全に解脱したとは言えない。即ち有余の解脱を成就し、有余の苦

を知り、有余の集を断じ、有余の滅を証し、有余の道を修したと言われ、故に少分の涅槃を得と言われるのである。これらの人は普通は二乗と呼ばれるが本經はこれに最後身菩薩を或は大力菩薩を合して三種意生身として呼ばれる。この三種意生身は、本經が又別に分段生死と變易生死とを説く中の變易生死を受けるものである。分段生死とは、凡夫の三界内において受ける生死のことを意味するが、變易生死とは、分段生死を離れて、大乘の菩薩に至るまでに受ける生死であつて所謂、二乗の聖者の住する位である。この三種意生身について、月輪教授は、プーサン氏仏訳の成唯識論に意生身について種々の經論に出て来る意生身の意味が違つていることを指摘し、勝鬘經の意生身を「成仏未究竟者への貶称に過ぎない」と説かれたことに長尾雅人氏が疑問を持つて「転換の論理」^②と題する論文中に少し触れておられる。即ち「かかる異つた意味があるとは思えず、又、勝鬘經の意生身を成仏未究竟者への貶称に過ぎないと考えのみでは却つて勝鬘經獨特の義が失われはしないか」と述べられた。思うに貶称という言葉がふさわしくないというの

は私も同感である。本經の特色が一切衆生の本質的無差別を認め万人成仏の可能性がゆるさされていることであるからかくのごとく考えられるのであるが、未だ無明住地の煩惱を脱せず、究竟の涅槃を得ていない人であることは事実として考えるべきであり、成仏未究竟者への総称、或は單に呼び名という程度に解せばよいのでなからうか。

このように見て来ると本經では絶えず衆生を三類に分けていることが知られる。前に如来藏と法身の章において述べた場合も、凡夫と声聞、緣覺と菩薩の三類であつたが、今は、分段生死が凡夫であり、變易生死が三種意生身であり、その上に仏が位する。故に一乗の教と二乗の教が並列的に別個に並ぶのではなく、二乗もそれが一乗への過程として説かれている。そのことを説いて經には、譬へば、すべての種子は皆地によつて生長することが出来るごとく、これら二乗の教も大乘によつて増長するのである。故に大乘に住し、大乘を受持するならば二乗の法もすべて受持することとなる^③と説いている。これが攝受正法ということなのであろう。このようにすべての法を綜括した上に大乘の教が

立てられ、二乗との対立という排他的なものでなく攝取せんとする態度に注意すべきである。このような考えによつて三乗即一乗が唱えられる。

本經においては一闡提の問題は何ら説かれていない。それは涅槃經や無上依經、或は宝性論、仏性論を待たねばならない。これらの經論においては詳細に衆生の問題が説かれているが、本經の衆生論は未だ十分ではない。譬へば無上依經では、本經で説かれる二種生死を生縁、生因、有々、無有の四種生死として説き、又衆生を明らかに、著有、著無、不著有無の三品に分ち、更に細分して五性に分けている。即ち著有の衆生に二あり、一は涅槃道に背き涅槃の性なきもの他は大乘を誹謗するものであり、この衆生が一闡提と呼ばれ、邪定聚と呼ばれるのである。第二の著無に行無方便と行有方便の二種あり、行無方便も更に二に分ち一は外道、他は仏法を信ずるも我見に著して正理を愛しないもの、行有方便も二に分ち一は声聞、二は緣覺であり、最後の不著有無は大乘を修行するものである。これらの説は多分に唯識學派の五性各別説に近いものである。し

かしこの中の一闡提に成仏の可能性があるか否かについては、涅槃經の後半に説くような明らかな説示はないが、讚歎品に、度すべきは提婆達多を最上と爲すといい、又菩提品にも衆生の四惑障を除く爲の教にも菩薩修行の信樂大乘眞法が説かれるのであるから一闡提成仏論に相通づるものと考えられる。

以上のことから勝鬘經の衆生論は、実にかかる衆生論を展開する準備段階であつたといつてよい。

① 月輪本 註 六一九頁

② 長尾雅人氏「転換の論理」哲学研究第四〇五号所収

③ 勝鬘經 一乗章 大正・一二・二一九・b

④ 無上依經上 菩提品第三 大正・一六・四七〇・c—四七二・b

仏性論二（大正・三一・七九九・a）では方便、因縁、有有、無有生

死

究竟一乘宝性論三（大正・三一・八三〇・b）では縁相、因相、

生相、裏相とす。

七

如来蔵染淨依持説に關する本經の説示は次のごとくであ

る。

世尊。生死者依_二如来蔵_一以_二如来蔵_一故説_二本際不_レ可_レ知。世尊。有_二如来蔵_一故説_二生死_一是名_二善説_一。世尊。生死者。諸受根没。次第不受根起。是名_二生死_一。世尊。生死者。此二法是如来蔵。世間言説故。有_レ死有_レ生。死者諸根壞。生者新諸根起。非_二如来蔵有_レ生有_レ死。如来蔵者離_二有_レ為_レ相_一。如来蔵常住不變。是故如来蔵。是依是持是建立。世尊。不離不斷。不脱不異。不思議仏法。世尊。断脱異外。有_レ為_レ法依持建立者。是如来蔵。世尊。若無_二如来蔵_一者。不_レ得_二厭_レ苦樂_一求涅槃。何以故。於_二此六識及心法智_一。此七法剎那不_レ住。不_レ種_二衆苦_一。不_レ得_二厭_レ苦樂_一求涅槃。世尊。如来蔵者。無_二前際_一不起不滅法。種_二諸苦_一得_二厭_レ苦樂_一求涅槃_一。

ここに考えられることは、如来蔵を六識以上の輪廻の主體なる根本識として説かれてゐるのではないかとの疑問が起り、註釈家の中にもかかる見方をする人がある。即ち一番問題となるのは「六識及心法智」という句であり、これ

を総称して七法というから心法智を第七識と考え、如来蔵を第八識とする説と、あくまで本經を六識所談の經典として理解しようという説とがあつて、大變理解に困難な場所である。ここで各註釈の理解の仕方注目したい。

〔宝窟〕於此六識及心法智者。有人言。六識者。六是事識。及心法智是第七識。迷時名心。解名法智第八藏識。

是阿利耶。此造疏人。不見撰論謂第七識名法智。撰論第八撰名阿陀那。此言無解識豈得称法智耶。今所明者。六識不異旧。及心法智者六識既是心王智是心教法故言心法智小乘人言由六識起煩惱能種苦由心法智。能厭苦樂求涅槃。何須仏性。^②

〔詳玄記〕言及心法智。是第七識。今經此既惣説八識如来蔵法。是第八識。既有六識。此心法智。自掌第七故。淨影云。及心法智。是第七識迷。迷時名心。解名法智。元曉云。心法智者。是第七識。恒与惠数相応俱起。故從所俱名心法智。楞伽經中。前為勝鬘等。説八識義。此当今經此文既有七識。此心法智。決定應是拳第七識。若不爾豈成八識。窟曰（右引用の宝窟の文と同じ）此義雖無蔵

識梨耶之言而是全当淨影解釈之義。^③

〔顯宗鈔〕寂曰。宝窟自釈義意未詳。恐文錯脱也。今謂心法智者即第六識相応厭欣等智也。此智雖起於第六識地推究其本根則無非是如来蔵心内熏自体相也。何以故以若無如来蔵心則六識刹那不住不可作厭等真所依故。^④

以上の三釈中、心法智を第七識とし、如来蔵を第八識として解釈しているのは、宝窟に引く「有人言」の説と詳玄記における擬然自身の説、及びそこに引かれる淨影、元曉の説とである。普寂は本經の所説を六識に限定せんとし、嘉祥もまた、八識説に対して批判を行つてゐるから六識説と見られる。この外の疏はこの問題については何ら触れないか又は明確を欠いてゐる。藤堂恭俊氏の説によれば、延昌四年書写本の勝鬘經疏には「心者意根、法智者意根中空解」^⑤とあつて、慧遠の起信論疏卷下の下にあるところの

小乘七心界中之意根界者是第七識。対治此執宜説妄識不同事識。七心界中意根者即是六識生後意辺説為意根。更無別法。

より考えると七心界説による理解ということが出来ることと述べられる。

以上の諸説中、いづれをとるか選択に苦しむが、ここで他の訳を参照して見る必要がある。

〔新訳〕

何以故。於此六識及以所知如是七法。刹那不住不受衆苦。不堪厭離願求涅槃。^⑦

〔西藏訳〕

de ciñi ślad du she na / bcom-ldan-ñdas rnam-par-
śes-pa drug-po gan-lags-pa ñdi dan / rnam-par-
śes-pa gan-lags-pa ñdi dan / bcom-ldan-ñdas ñdi-ltar
chos bdun-po ñdi-dag ni mi-gnas-pa dan / skad-
ciñ-pa dan / sdug-bsnal-rnams myon-ba ma-lags-
pas chos-de-dag ni sdug-bsnal la skyo-ba dan /
nya-nan-las ñdas-pa la ñdod cin don du gñer-ba
dan smon-par mi-rigs-so /

それは何の故か、世尊よ、これら六識と、この識とは、世尊よ、是の如き此れら七法は住せず刹那であり、諸苦

を受けない故にこれらの法は苦を厭い涅槃を樂求することとはふさはしくない。

旧訳で心法智となつているところを新訳では所知と訳され
西藏訳では rnam-par-śes-pa 即ち識であり、梵語 vijñāna
の訳語である。若しそうであるとすれば旧訳で心法智に相
当するところが一種の識として理解されてもよいわけであ
る。今仮に識として解釈するならば、六識と今言う識とを
総称して七法というから六識中の識とは考えられず別の識
と見なければならぬ。それは又根本識とも考えられな
い。何故かといえば、前六識と同様に刹那に生滅するもの
であり、諸苦を厭い涅槃を樂求しないものであるというこ
とが語られているから第七識と見ることも出来る。又、不
生不滅であり、無始無終であつて諸苦を種へ、苦を厭い涅
槃を樂求する如来藏は先の七法とは根本的に相違する別の
存在であるから第八識として理解することも可能である。
別の煩惱との関係より見る時、本経の立場は客塵煩惱であ
るが、同じ客塵煩惱を主張する心性本淨説では、心性を本
淨とし、煩惱を客塵とする為には、相續心を認めて、煩惱

は心とは不相応であることが説かれねばならなかつたのであるが、今の場合は刹那心は起煩惱と相應するが、自性清浄心は、上煩惱と相應しないから、上煩惱に染汚されるのである。このことを示すのが次の經文である。

此性清淨。如来藏而客塵煩惱。上煩惱所_レ染。不思議如来境界。何以故。刹那善心非_二煩惱所_レ染。刹那不善心亦非_二煩惱所_レ染。煩惱不_レ触_レ心。心不_レ触_二煩惱_一。

即ち心が刹那なれば煩惱の所染ではないが、所染は自性清浄なる如来藏であり、これは不生不滅の法である。ここに相続心として、或は輪廻の主体としての如来藏が説かれているのではないか。このような考え方から出發したのが楞伽經や、大乘密嚴經等の識説的説示であろう。楞伽經には阿梨耶識者。名如来藏。

此如来心阿梨耶識如来藏諸境界。一切声聞辟支仏諸外道等不能分別。何以故。以如来藏是清淨相客塵煩惱垢染不_二淨_一。

如来藏名藏識。

如来藏藏識本性清淨。客塵所染。而為不_二淨_一。

と説き又大乘密嚴經には、

如来清淨藏 亦名無垢智

常住無始終 離四句言説

仏説如来藏 以為阿頼耶

惡慧不能知 藏即頼耶識

如来清淨藏 世間阿頼耶

如金与指環 展転無差別

これらの經典は、第三期大乘經典の成立に属すると見られるが、この時代には、完全に第八識と見られ、不生不滅常住の清淨識が如来藏即ち阿梨耶識と考えられている。又大乗起信論では、

依_二如来藏_一故有_二生滅心_一所謂不生不滅与_二生滅_一和合非一非異名為_二阿梨耶識_一。

と、不生不滅と生滅の和合せるものとしての阿梨耶識が説かれ、又如来藏との關係が密接な形で示されている。

以上のような考えは、勝鬘經のかかるところに起因するものであると言うことは出来ると思う。但し、勝鬘經自身が、如来藏を識説的に意識して説いたと考えることは早計

であろう。何故に心法智と訳し、或は所知と訳し、或は nam-par-ses-pa と訳したかということが解決されなくてはならない。

生死を厭い涅槃を樂求するという文は、宝性論、仏性論に受け継がれている。宝性論では、

見^ニ苦果樂果一此依^レ性而有苦無^ニ仏性一者不^レ起^ニ如是心。^⑬

といい、文は少し違うが同じことをいつているもので、生死も涅槃も如来蔵によるとするのであるが、宇井博士は、この思想は華嚴系統にあつた三界虚妄唯是一心作の思想の発達したものであると述べられる。後世の如来蔵縁起説では、この部分が極めて重要な地位を占めるが未だ本経では、ごく簡単に説かれているに過ぎない。

- ① 勝鬘經自性清淨章 大正・一二・二二二・b
- ② 勝鬘宝窟下末 大正・三七・八三・b-c
- ③ 勝鬘經疏詳玄記一八 大日本仏教全書四、二七一上—下
- ④ 勝鬘師子吼經顯宗鈔下 大日本仏教全書四、三六三下—三六四上
- ⑤ 藤堂恭俊氏「如来蔵の識說的理解」印度学仏教学研究第二卷

第一号所収 一五二頁

- ⑥ 照法師、勝鬘經疏 大正・八五・二七七・a
- ⑦ 勝鬘夫人会 大正・一一・六七七・c
- ⑧ 月輪本 一四八頁
- ⑨ 勝鬘經自性清淨章 大正・一二・二二二・b
- ⑩ 入楞伽經（十卷本）七 大正・一六・五五六・c
- ⑪ 入楞伽經 五五七・a
- ⑫ 楞伽阿跋多羅宝經（四卷本）四 大正・一六・六二〇・a
- ⑬ 大正・一六・六一九・c
- ⑭ 大乘密嚴經下 大正・一六・七七六・a
- ⑮ 大乘起信論 大正・三二・五七六・b
- ⑯ 究竟一乘宝性論三 大正・三一・八三一・a
- ⑰ 宇井伯寿博士 印度哲学史（岩波版）三二〇頁

八

勝鬘經自性清淨章に

世尊。如来蔵者。是法界蔵。法身蔵。出世間上上蔵。自性清淨蔵。^①

と説かれるものは、古来より如来蔵の五蔵義と呼ばれ、これ又、勝鬘經の創説であつて、他の經典には全然見ることの出来ないものであるが、仏性論、摂大乘論、宝性論、顯識

論等の論書に継承せられている。本経では唯、五藏の名目を挙げるのみでその解釈は何ら説かれていないので宝窟以下の疏は多く仏性論の解釈によつてゐる。仏性論によればその一々について次のごとく解明されている。

如来藏有^二五種^一何等為^レ五。一如来藏自性是其藏義。

……二者正法藏。因是其藏義。……三者法身藏。至得是其藏。……四者出世藏是真實是其藏。……五者自性清淨藏。以秘密是其藏義。^③

とし、又真諦訳の撰大乘論釈には界の五義として、

此即阿黎耶識界。以解為性。此界有五義。一体類義。一切衆生不出此体類。由此体類衆生不異。二因義。一切聖人法四念処等緣此界生故。三生義。一切聖人所得法身由信樂此界法門故得成就。四真實義。在世間不破。出世間亦不尽。五藏義。若応此法自性義故成^レ内。若外此法雖復相応則成穀故。^④

と説き、顯識論は三性説の性を解釈して、自性種類、因性、生、不壞、秘密藏の五を各々説いているのは、言葉こそ少々異なるが、述べんとする趣旨は全く一致しており、こ

の仏性論の説が伝統的解釈として後世まで受け継がれていることが支那、日本の註釈書の中にもあらわれているのである。しかし聖徳太子の義疏には少し異つて、

一如来藏。蘊^二在惑内^一故名^レ藏。亦含^二当果^一故名^レ

藏。二法界藏。謂仏果含^二照法界^一。又云。是常住法性。

三法身藏。謂法身含^二万德^一故名^レ藏。^⑤

とし、第四、第五は解釈しないが凝然は詳玄記にこれを追加して、

言^二出世間上上藏^一者。二乘無漏超^二出世間^一。是世間

上。如来藏性。高居^二二乘出世之表^一。故名^二上上^一。如^レ

二乘名^二出世^一。一乘名^二出出世^一。言^二五自性清淨藏^一者。

此是当章惣名。藏性真理皎潔無垢。故云^二自性清淨^一。^⑥

と言う説を出しているが、他の疏を見ても、この両説を出るものはない。

ここで常に不思議に思うことは、如来藏に五藏の義があるといひながら、普通ならば如来藏を除いて五義を出すところをこの場合に限り如来藏をも含めて五としているのである。しかし宝性論には、

如来藏者。是法界藏。出世間法身藏。出世間上上藏。自性清淨法身藏。自性清淨如来藏。^⑤

となつていて、如来藏を除いて五藏義があるごとく説いている。しかしこの方は、出世間、自性清淨、法身藏がそれぞれ二回繰り返されて、わざと五にしたようであり又、註疏にも宝性論にその説があるというのみで殆んど仏性論による等、やはり如来藏をも含めて五藏義とする方が正しい形であるようである。いづれにしてもこれは如来藏の性格を五つの方面から明らかにされた説であると見られる。

- ① 勝鬘經自性清淨章 大正・一二・二二・b
- ② 勝鬘宝窟下末 大正・三七・八五・b—c
- ③ 仏性論二 大正・三一・七九・b
- ④ 真諦、撰大乘論积 大正・三一・二六四・b
- ⑤ 顯識論 大正・三一・八八一・c—八八二・a
- ⑥ 勝鬘經義疏 大正・五六・一八・b
- ⑦ 勝鬘經疏詳玄記一八 大日本仏教全書四、二七二下
- ⑧ 究竟一乘宝性論四 大正・三一・八三九・a

九

以上において一切衆生の最高目標たる如来の性について、又、現実の煩惱所纏の衆生の相について考察したのであるが、それではいかにすれば涅槃が得られるのであるかということが宗教としての仏教思想を考へる上に於て最も重要なことである。如来藏思想では煩惱に覆われた如来藏法身はいかにして顯現されるかということが即ちそのことを意味するものである。本經の所説を要約して言うならば、如来藏空智を得ることであり、断常二辺の見を離れて正見に徹することである。即ち、無常を常と見、苦を樂と見、無我を我と想い、不淨を淨と見ることは、外道の我見であり顛倒の見であるとして退けられ、又諸行無常と計するは断見であり、涅槃常住と見るは常見でそれは二乗の見であるとして退けられ、兩者いづれをも否定したところに打樹てられる常樂我淨波羅蜜こそ大乘菩薩道の見である。絶対の否定は絶対の肯定であるといわれるが、しかしその否定されて後の肯定は最初の単なる肯定とは異なるものであるという般若の論理がここにも見られる。かかる智を得た

ものは、最早、声聞でも独覚でもなく仏と呼ばれ得べきである。本思想の先驅と考えられる心性本淨説に於いても如実知見なる語が用いられているのもかかる体系の一環として考えらるべきであろう。舍利弗阿毘曇論に

心性清淨。為客塵染。凡夫未聞故。不能如実知見。亦無修心。聖人聞故。如実知見。亦有修心。^①

この文は如実知見するかしらないかで凡夫と聖人が区別されるという換えられるだろう。ここでは単に聖人というのみでいかなる聖人かは詳かにしないが、如来藏経では、如来藏が衆生の身中に存することをいう場合、常に「仏眼を以つて観れば」という前置きを欠かさない。この仏眼が今の如来藏空智と解され得る。この思想の先驅をなすと思われる華嚴経如来性起品にも、

以無障礙清淨天眼。觀一切衆生。觀已作如^②是言。奇哉奇哉。云何如来具足智慧在^③於身中。而不^④知見^⑤。

とあり、無障礙清淨天眼がそれに当ることは明らかである。不増不減経では経の全体が仏の如実空見を明かすこと

に費されている。即ち衆生界を増と見るも減と見るも如実空見を遠離せるが故である^③と増減の見を貶し

此甚深義乃是如来智慧境界。亦是如来心所行处。舍利弗。如是深義一切声聞縁覚智慧所不能^④知。所不能^⑤能^⑥見。不能^⑦能^⑧觀察。何況一切愚癡凡夫而能測量。唯

有^⑨諸仏如来智慧。乃能觀^⑩察知^⑪見此義^⑫。

として衆生界は如来藏であり、法身であるから不増不減とするのも勝鬘経に説く断常二見を遠離した正見であり、如来の智慧と言うのは又、如来藏空智であり、それによつて如実知見することが要請せられる。その智を得るにはどうすればよいかということは、本経では初めの方に説く摂受正法であり六波羅蜜の行であろう。両者は、「摂受正法即是波羅蜜^⑬」として即で結ばれているが又、「摂受正法者是摩訶衍^⑭」としてそれが即ち大乘道である。初期の如来藏経典では修道の実践的な面があまり強張せられていない。如来藏経には、

専心修学便得^⑮解脱^⑯。

とあるのみである。不増不減経には、

行^ニ十波羅蜜。撰^ニ八万四千法門。修^ニ菩提行^ヲ。^⑧
とし又

汝今^レ学^ニ此法^ヲ。化^ニ彼衆生^ヲ。令^下離^ニ二見^ヲ。住^中正

道^中。舍利弗。如^レ是等法。汝亦^レ应^下学^ニ離^ニ彼二見^ヲ。住^中

正道^中。^⑨

とあり、勝鬘の六と十との差はあるがやはり波羅蜜行を説き、撰受正法に当る撰八万四千法門を説き、又、二見を離れることなど同じ趣旨の修行が教えられており、あくまで自力聖道門的立場である。更に観過すべからざることは、一切衆生に同じ道を教えていることであつて、凡夫にはこの教、二乗にはあの教と衆生によつて修道の方法が異なることである。これは未だ衆生觀の發達していないことにも起因するのであるが、無上依經や仏性論、宝性論^⑩の後期經論によれば、大乘以外の四衆に対し、一々その障を対治する為に、一闡提には信樂大乘の法、外道には般若波羅蜜の法、声聞には破虛空藏三昧、緣覺には、大悲をそれぞれ説いている。それによつて、四種の惑を除き、四顛倒を治し、能く如来の無上最妙法身の四徳波羅蜜の果を証せ

しめんとするのが目的である。勝鬘經では三乘即一乘の立場をとる為にかかる差別によつて説く必要もなかったであろう。

① 舍利弗阿毘曇論二七 大正・二八・六九七・b

② 華嚴經(六十卷本)三五 如来性起品 大正・九・六二四・a

この思想は更に無上依經上、如来界品(大正一六・四七〇・a)にも受け継がれている。

③ 不増不減經 大正・一六・四六六・b

如^レ是等人起^ニ増減見^ヲ。何以故。此諸衆生以^レ依如来不了義經。無^ニ慧眼^ヲ。故。遠^ニ離如実空見^ヲ。故(*官内省本は知見)

④ 不増不減經 大正・一六・四六七・a

⑤ 勝鬘經撰受章 大正・一二・二一八・c (二ヶ所)

⑥ 同 經一乘章 大正・一二・二一九・b

⑦ 大方等如来藏經 大正・一六・四五七・c

⑧ 不増不減經 大正・一六・四六七・b

⑨ 同 經 大正・一六・四六七・c

⑩ 無上依經上、菩提品、大正・一六・四七一・b—c

究竟一乘宝性論三 大正・三一・八二九・a

仏性論二、弁相分第四、明因品第二 大正・三一・七九七・a

以上述べ来たところによつて、勝鬘經の如来藏思想のポイントは次の二点である。

その一は、他の宗教であれば、神は絶対者であり、下の衆生に対し救済せんと働きかけるのであるが、たとい救われたとしても神にはなれない。本質的に神と人とは絶対相容れないものであるが、仏教に於いては、如来は一切衆生の中に内在しているものであり、又同時に、如来は一切衆生を包んでもいるので、如来と衆生は相依相待の關係にある。それ故に衆生はいつでも如来となり得る可能態にあるわけである。換言すれば、両者は本質的に無差別平等であると言える。ここに仏教の特異性がある。

その二は、如来が衆生の中に内在するといえば、一見、有的な、実体論的な思想のように考えられやすい。しかし、有的な、実体論的な考えは仏教の最も誠るところであつて、そのように理解しては仏教の範疇より逸脱してしまうであろう。如来藏はあくまで空を止揚した勝義空としての不空如来藏として説かれる。それは又、我を否定した無我

をも止揚する段階を経て説かれた常楽我淨の波羅蜜であり、斷常二見を捨てて得られた本經所説の正見も、ことごとく妙有的な展開と考えられる。山口益博士が、「般若思想史」^①の中に於いて、「如来藏思想が大乗般若の理解解釈として歴史的事情の中に興起したものである」と記される所以も、実にかかる見地からであろう。

右の二点を理解する時、本經が、仏教思想の特色を明確にあらわし、又、その粹を十分に發揮していることを知るのである。

① 山口益博士「般若思想史」八四頁、一二二頁